

## 第61回日本泌尿器科学会中部総会

### シンポジウム 4「尿路結石ガイドライン： 改訂版の概要と上手な使い方」

—座長の言葉—

郡 健二郎<sup>1</sup>, 鈴木 孝治<sup>2</sup>

<sup>1</sup>名古屋市立大学, <sup>2</sup>金沢医科大学

#### GUIDELINES ON UROLITHIASIS: AN OUTLINE AND EFFECTIVE USE OF THE REVISED VERSION

Kenjiro KOHRI<sup>1</sup> and Koji SUZUKI<sup>2</sup>

<sup>1</sup>The Department of Urology,

Nagoya City University Graduate School of Medical Sciences Medical School

<sup>2</sup>The Department of Urology, Kanazawa Medical University

Progress has been made in the diagnosis and treatment of urolithiasis over the last 10 years, after the first version of the Guidelines on Urolithiasis was published in December 2002. Considering such a situation, the revised version is due for publication soon. At this symposium, 3 persons who were engaged in the revision of the guidelines presented its digest. The revised version is characterized by the adoption of a “Frequently asked questions style”, aiming to facilitate its usage as a reference book or dictionary readers can refer to when a question is raised in practice. It may be possible to further promote the medical treatment of urolithiasis by effectively using this in combination with the relatively textbook-like first version.

(Hinyokika Kiyo 58 : 695-696, 2012)

**Key words** : Molecular targeted therapy, Adverse events

「尿路結石診療ガイドライン」の第1版は2002年12月に発刊されている。その後の10年間に、尿路結石の診療は進化をとげており、それに対応して改訂版が近く上梓される予定である。本シンポジウムでは、ガイドラインの改訂に携わられている3名から、そのダイジェスト版をご発表いただいた。

まず安井孝周先生が、「尿路結石の診療にかかわる疫学」を講演された。2005年に尿路結石の全国疫学調査が行われたが、この調査は1965年から10年ごとに行われているものである。この疫学調査から得られる情報は多く、世界にも類がない貴重な研究資料として高く評価されている。例えば、「なぜ発生率は増えているのか？なぜ男女比は常に2.35対1といつも一定なのか？なぜ同じ地域差が常にあるのか？」などの素朴な疑問はつきない。それらの疑問への答えを探求することは尿路結石の病態の解明と再発予防などの診療に役立つものである。

麦谷荘一先生からは、「診断・治療」が報告された。1985年に札幌三樹会病院に、わが国で最初に導入されたESWLは、今では外科的治療の中心になっている。一方、近年の内視鏡と砕石器の開発には目を見張るものがある。その結果、ESWLでは砕石できなかった

結石などに対して、TULを選ぶ症例が増えている。最近の話題としては、「α1ブロッカーが尿管結石の排石促進に有用である」ことである。それらの基礎的、臨床的データを基に、現在臨床治験が行われている。このような治療における最新情報を海外のデータを含め紹介された。

宮澤克人先生からは、「再発予防の進歩」が語られた。前述の全国疫学調査によると、この40年間に尿路結石の発生率は漸増しているが、今回の2015年の調査では、「尿路結石の発生率に頭打ちの兆しがみられた！」と言えるようにしたいものである。そのためには患者には再発予防の大切さを説き、社会に向けては「尿路結石は生活習慣病であり、腎機能を低下させるCKD疾患である」ことを広く啓発する必要がある。ガイドラインはこれらの目的にも有効に用いられるべきだと思う。

「尿路結石診療ガイドライン」が特徴的な点は、疫学・診断・外科的治療・予防までの尿路結石のすべてを一冊にまとめられていることである。尿路結石は多因子疾患で、再発予防や外科的治療の方法は発生部位や結石成分により同じではない。このような多岐にわたる尿路結石を1冊にまとめられた理由は、初版刊行

時に、当時の日本泌尿器科学会の守殿貞夫理事長が、日本泌尿器内視鏡学会（旧 EE 学会）と日本尿路結石学会との3つの学会を1つにまとめられたリーダーシップによるところが大きい。一冊のガイドライン書により、泌尿器科医にとっては尿路結石を統合的にとらえることができ、尿路結石のすべてを会得できることから、その意義は大きい。

次の改訂版の特徴は「Q & A 形式」を取り入れたこ

とで、使いやすく工夫されている。診療で疑問に思った時には、参考書や辞書のようにして手軽に調べることができるものと思う。どちらかと言うと初版が教科書タイプであったので、これら2つのガイドラインを併用することにより、尿路結石の診療がより深まることであろう。

(Received on August 30, 2012)  
(Accepted on August 30, 2012)